


HSKS  Archeでは、北播磨での市民活動にご理解いただき、支援されている方、あるいは活動されている方々に対し、シリーズ「聞く」と題してインタビューを行っております。vol.8は藤本 百男さんにお伺いしました。

Series
聞く
シリーズ「聞く」
Vol.8



■テーマは「まほろばづくり」

わたしたちは自分の住んでいるこの地のことをどれだけ知っているのだろうか。加古川が流れ、タヌキのすみかである小高い山があり、見通しのいい田園風景が広がり、彼岸花も蛸も蝉の声もごく身近にある。四季折々に表情をかえながら、代々この地に暮らす人々たちを見守ってきた自然だ。そこに、産業や伝統文化や歴史が根付いている。藤本さんは、ふるさと加東市を「兵庫のまほろば」と言われる。まほろばとは、『優れた良い所、良い国』。郷土史研究をライフワークにされてきた先生は、『地域の歴史を発掘し、先人の生き方や努力を知れば知るほど、ふるさとへの歴史や伝統への愛着が深まってきます』とブログに書いておられる。27年間の教員生活にピリオドを打ち、「ふるさとをもっともっとよくしたい」という志に導かれるように、この春、県会議員への道を歩み始められた。今回は、そんな「ふるさと再発見」に意欲的に取り組んでおられる藤本百男さんにお話を伺ってみました。

「教育は人格のぶつかりあい」

— 昭和54年加古川市で小学校の先生としてスタートされたのですが、なぜ教師になりたいと思われたのでしょうか？

本当は、新聞記者になりたかったんですよ。ただ、家庭のこともあり、地元に戻って就職しようという気持ちは強かったですね。原点は、早稲田にいた当時の大学の荒廃かなあ。その頃、学生運動の内ゲバが激しくなっていて、キャンパスは警察も入り込めない無法地帯だったんですよ。その時に目の当たりにした一人の学生の死が、人の生き方、国のあり方、何が正義なのかということを考えるキッカケになりました。いったいこの事態を誰が収拾して大学を正常化させるのか、自分たちの生き方はこれでいいのだろうか、という気持ちがベースになったことは確かですね。やはり教師になるにしても政治を志すにしても、何をやるにしても人間の志のありようが大事であると思っています。

— 教師としての27年間を振り返って、教育とはいったい何だと思われますか？

そうですね、僕は人格のぶつかり合いじゃないかと思っています。例えば、社会の授業で歴史を一所懸命教えますよね。基本的には、知識を教える。でも、子供に本当に伝わっているのは藤本百男という人間の人格なんです。知識は一日たてばだいたい忘れていきます。でも、子供を叱るときも楽しむときも一所懸命、それこそ真面目にやっていると、あの時、先生は一所懸命やっていたなと厳しく叱られた



なあといったことが最後に残っていく。なぜかという、知識を伝授しているようで、実は私と生徒との間に人格の交流があり、最後に子供に残っていくの

はそうした互いの人格だと思います。例えば、一つのクラスで38名いれば、互いの人格が子供同士で影響しあって残っていく。だからクラスメートってというのは一生つきあうようになるんだってという話もよくしましたね。

— 今の時代は人間関係が希薄だと言われていますが、そういった人格がぶつかりあうには何が必要なのでしょう？

本気で一所懸命にやることです。それしかない。例えば、授業ひとつにしても、ごまかそうしたら子供は見抜きます。少々授業が下手でも、こちらが一所懸命になっている姿が、そのまま鏡となっていきます。教えるほうも必死、教えられるほうも必死にならざるをえない。それは親子関係でも一緒だと思いますよ。表面的には厳しいとか怖いとかになるんですが、本気でぶつかれば、父親母親にしても、真面目に叱ってくれたとか、楽しむときはおおいに楽しんでくれたなという感受したことが心に刻まれていくのではないのでしょうか。

「安心して失敗できる場所」

— 子供が育っていくのに何が大切であるとお考えですか？

うーん、必ずしも快適でない方がいい場合もあるんです。悪い環境を少しでもよくしようと能力が育っていく。今は便利すぎて、その子の持つ力がうまれる場がないように思います。例えば、小学5年生にトイレ掃除をやらせたとき、最初はうまくできない。ウンチが落ちてたり、汚れた便器を嫌がる。でも、少し手を貸してやっていくうちに、綺麗になつていくのが楽しくなっていく。褒められることで、もっと綺麗にしようと思う。なーんだ、6年生のトイレより綺麗じゃないか、と自慢に思えてくる。すると、その掃除のやり方を今度はクラスみんなに伝えていく。自分の手でやることで会得していくもの、それが大事だと思いますね。

— 今の時代の子供たちに危機されていることは？

やはり、あまりに豊かすぎて、踏ん張れない子供が多いことです。先行きが分からない。かといって、危機感もない。わたしはたくさんの失敗をしないと、人は育たないと思っているんです。安心して失敗できる場所があればいいのですがね。川遊びや野外学習でも、何も

かも大人がこしらえて設定した枠のなかでしか子供たちは自然と関われない。難しいところですね。

「ふるさとを知ること」

— なぜ、教育の現場から、県会議員という政治の世界に飛び込まれたのでしょうか？

地域の周囲のかたに薦められたこともあるのですが、やはり生まれて育ったこの地のお役に立ちたい。教師という立場をこえて、政治という場から、このふるさとをよくしたい。それが、動機です。人間は自分のこと一考えても、ひとり勝手に生まれてひとり勝手に生きていくわけではありません。生まれてくるのも縁があって、育っていく過程には家族そして地域そして人間関係だけでなく、その地域の自然や風土や文化といったものに大きな影響を受けています。例えば、信州の山深いところで育つと、この播磨の田んぼを眺めながらのんびり育っていく人間とはずいぶん違います。やはり環境との関係で育っていくということは、非常に大きなことなんです。そうすると、自分の今いる環境のことを歴史も人もして自然もしっかり知っていくことが、よりよい生き方につながるのではないかなと思うのです。

— 兵庫教育大学附属中学校で社会科の先生をしていらしたのですが、授業でそういうことも取り上げておられたのですか？

例えば、毎日見慣れた風景である社の用水路ひとつをとってみても、今はずっと水が流れているけれど、附属小学校に勤めていた当時、滝野台地には5月の末になってダムからの水が流れてくる。そうすると、水路があって分水するところがあり、まるで井戸のようなものなんです。そこから水路が分れている。子供たちは、これは何だろう？というところから出発します。井戸だろうか？ みんなで考えながら実際に歩いてみると、水は分水口からあがってくる。水の呑み口は道路を隔てた向こう側なので、水がどこからあがってくるのかが見えない。子供にとっては凄く不思議ですね。水路を辿っていくと、東条ダムにつながっている。この赤土の大地には水源がないので、東条ダムの建設が滝野の開発に結びついていったんですね。そこには、電気も水もない土地を開発した人たちの苦労があり、東条ダムにはその湖に沈んでしまった村の話もあるわけです。そうして地域の歴史を知っていくことで、その土地の人々の生き方や苦労が見えてきます。

最後にお世話になった滝野東小学校で、「未来に伝えたい滝野の歴史」をテーマに子供と勉強したのですが、例えば道しるべがありますよね。子供にしたら墓石ぐらいに思っているわけです。自転車で止まるときに足をかけるとか、しんどかったら腰がけるぐらいのものだった。その見慣れた石が実は道標で、加東四国八十八ヶ所の巡礼道の大切な道標であると分ると、子供たちは「へー」と思う。今までどこにでもあのような何も思わなかった石が、いろんなことを知っていくと、その道打ちが分ってきて、ただの石でなくなってくる。すごいものがあるんだって、その価値に気づく。そうするとそういうものを大切にしていきたいと思うようになりますよね。それが自分の存在ということにつながるのではないのでしょうか。

今は子供がバーチャルの世界で生きています。だから、せめて子供の間に「ここはいいなあ」という体験をいっぱいさせて、故郷のよさを実感していれば、やがて「住むならやっぱり故郷がいいな」と思えるように



なるんじゃないでしょうか。人は自分の住んでいる環境をよりよくしたいという気持ちで自然に持っているものだと思います。そういう思いをもった人たちが一緒に関わって体験すれば、互いの共通の夢はもっと強くなると思います。だから、地域活動は大切なことなんです。

— 時代とともに、そういう地域と人との関わり方も変わってきたように思いますが、いかがでしょうか？

村には昔から、それぞれの組織があって、基本的にはボランティアです。村の役や婦人会といった伝統がありました。最近、こういった昔からの自治組織的なものが壊れそうになっている中で、じゃあ無くなるかという、又、自然に人と人の触れ合う社会活動がうまれて

いっています。わたしの住んでいる地域でも、年々、子供会に入る方が少なくなり、親同士の付き合いも疎遠になりがちでした。それで、もう一度取り戻そうという願いから、「三区キッズ」というグループが作られました。夏休みのラジオ体操のあとに公民館で30分だけ勉強しようとか、時には朝食会もしながらひと夏を過ごしたんです。非常に好評で、お年寄りの方も寄ってくる。学校とは違って、近所のおじさんおばさんが勉強をみてる。元美術の先生が工作教室をしてみたり、冬には餅つき大会もやってみたりした。すると、おばあさんの出番です。みんな得意技で参加されるので、読み聞かせをやっている人がいたりします。そういう新しい世代間交流の場がうまれてきて、新たな結びつきができたことは非常に大切だと思います。

「体験から学んだものを人に伝えていく」

— そのボランティアのありようについて、お尋ねしたいのですが？

わたしは無理のないところで、地域の役に立ちたいという気持ちを自然にかたちにしていければいいと思うんです。ボランティアはやらなきゃいけないもんでもないし、急ぎ立てられてやるもんでもない。きつかけは必要だと思いますが、ラブな感じでやっていければいいんじゃないでしょうか。そして、体験から学んだものを人に伝えていく。それが大事だと思いますね。

— これからの地域づくりについて、どうお考えですか？

私は「まほろば」という言葉が非常に好きということもあるんですが、北播磨ということで考えれば北播磨がまほろばですし、兵庫で考えれば日本のまほろばは兵庫。よりよい生き方や文化をつくりあげていくところ、そういう場所が「まほろば」だと思うんです。そういう意味で、私は北播磨というところは実に多様な可能性があるところだと思っています。田舎というと、遠くにあっただけお金と時間をかけていくところというイメージがあるのですが、まさにここは「近くの田舎」なんです。例えば、加古川市からみれば、まさに風景といい、産物といい、求めているものを十分に満足させてくれる「近くの田舎」なんです。そのことに自ら気づいてほしい。まさに、よきところの「まほろば」なんです。安全・安心で、自然環境に恵まれて災害に強い。そんなよきところ「まほろば」になるように、これからも「まほろばづくり」をしていきたいと思っています。

— 最後に、私たちボランティアの活動場所であるアルシェに一言お願いします。

つどいの場としてこのうるおい交流館エクラもまた、よりよい暮らしづくりの一つのあらわれであると思っています。皆さんのそれぞれの夢に向けて、がんばってください。

(平成19年7月19日 エクラにて)

藤本さんのオフィシャルウェブサイト <http://www.hyakuo.net>
ブログ「百男百見」も必見です。